# ゲート - 2. 炎龍編 -

自衛隊 彼の地にて、斯く戦えり

柳内たくみ



#### ロシア

ジェガノフ …… ロシア連邦大統領。『特地』からの資源流入によるロシアの影響力低下を懸念して、様々な策謀を巡らせている。

#### 異世界(特地)

**デュ力・ルナ・マルソー** …………165歳(外見は16~17歳)。金毛碧眼のエルフ上位種族の娘。父ホドリュー・レイ・マルソーとともに、コワンのエルフ村で生活していたが、古代龍の襲撃によりコワンの村は全滅し、一人生き残る。

**レレイ・ラ・レレーナ** ……………15歳。ヒト種の賢者、魔導師。 老賢者カトーの二番弟子。理知的で優れた才能を持つが、それだけに情緒に 欠ける。細い体つきのため、年齢より幼く見られることがある。

ロウリイ・マーキュリー ………961歳(外見は13歳)。 亜神、神エムロイの使徒。 死神ロゥリィとあだ名され、華奢ながら巨大なハルバートを操り容赦なく敵を切り裂く。 異世界の神官服であるフリフリの黒ゴスを纏っている。

**モルト・ソル・アウグスタス** ………異世界の帝国皇帝。帝国の覇権拡大を図るために、ゲートを越えて日本にまで出兵を試みる。

**ピニヤ・コ・ラーダ** ………………19歳。モルト皇帝の美人娘。帝国と日本との間にある国力の差にいち早く気づき帝国を守るために奔走する。伊丹と関わったため、おたく文化に接触して強い影響を受ける。

ヤオ・ハー・デュッシ ……………315歳(外見は20代後半~30代前半)。ボンテージ鎧のよく似合う肉感的な美人ダークエルフ。猟に出れば罠を踏み、買い物に出れば店が閉まっていて、恋人は親友に奪われてしまうという不運な人生(エルフ生?)を送ってきた。炎龍によって滅びに瀕した一族を救うために、我が身も省みず「緑の人」を捜す旅に出る。

#### 日本

いたみ ようし

伊丹耀司 ……… 33歳。陸上自衛隊二等陸尉、第三偵察隊隊長。いわゆるおたく趣味の持ち主。同人誌やネット上の小説や漫画を愛読する。仕事は 生活と趣味のための収入源と割り切っている。

くらた さんそう

**倉田三曹** ………… 21歳。第三偵察隊に所属。伊丹の乗る高機動車のド ライバー。猫耳萌(ケモノ系萌)の趣味を持ち、先輩の伊丹ともおたく話で盛り トがる間柄。

くろかわ にそう

黒川二曹 ……… 23歳。第三偵察隊の女性自衛官。看護師でもあり、 身長 190 cmの美女。ゆったりとしたお淑やか口調だが、なにげに毒舌を放つ。

くりばやし し

**栗林志乃** ……… 24歳。第三偵察隊の女性自衛官。陸上自衛隊二等陸 曹。小柄ながら豊かなバストを装備するが、格闘徽章を有する猛者でもある。

とみたあきら

**富田章** …………… 27歳。第三偵察隊に所属。陸上自衛隊二等陸曹。レンジャー、空挺徽章の二つを併せ持つ。通信制の大学で天文学を学んでいる。

もりた

森田総理大臣 …… 辞任した本位の後を継いで総理大臣に就任する。事なかれ主義者の上に、深く物事を考えている様子が見えないので、周囲からは不安視されている。

かのうたろう

**嘉納太郎** ……… 日本の外務大臣。おたく趣味の持ち主として国民に知られ、かつては伊丹ともおたく仲間だった。

すがわら こうじ

**菅原浩治** ……… 外務省のエリート官僚として将来を嘱望されている。 官僚トップの座を狙って冷徹な野心家を演じているが、意外にも熱血漢だった りする。

りさ

梨紗 ……… 伊丹と離婚した元妻。女性向け同人誌作家。

#### アメリカ

ディレル …… アメリカ合衆国大統領。 『特地』 から得られる利権拡大を狙って、様々な陰謀を巡らせている。

#### 中国

とう とくしゅう

**臺徳愁** ………… 中華人民共和国国家主席。 『特地』 に移民を送り出す ことによって、利権独占を狙っている。





すでに執務室内は明るくなっていた。 帝国皇女ピニャ・コ・ラーダが目を醒す。

眩しいほどだった。 帝都は、碧海と呼ばれる海から内陸に徒歩で二日ほどのところにある。 開かれた鎧戸から、 朝の陽射しが差し込んで閉じた瞼にも 陽射しこそ強いが、

暑さは北の氷雪山脈から流れてくる涼やかな風が和らげてくれるので、 皇宮は帝都五つの丘のうち最も東寄りの丘、 サデラ中腹にある。 非常に過ごしやすい。

森からは清々しい糸杉の香りが運ばれてくる。 そのさらに東麓の緑苑が彼女の居館として割り当てられていた。ここは風通しに優れていて東の 頭がすきっとするこの香りが、ピニャは大好きだっ

っ伏していた。 言われてみれば、 執務室の鎧戸をつぎつぎと開いていく書記のハミルトンは、 ベッドでお休みにならなかったのですね」 この世界で「トュニ」と呼ばれる婦人用正装をまとったまま、 ため息混じりにお小言を並べた。 ピニャは机に突

ばれる『紙』が便利なので愛用している。 その殆どが羊皮紙だが、最近はアルヌス協同生活組合から購入するようになった『コピィシ』と呼 の上には、各種の書類が山と積まれていた。それに加えて、あちこちから送られてきた手紙類。

「あっ、しまった」

きたフォルマル伯爵家の財務状況報告書だった。目を通している内に眠ってしまったのだろう。 見れば手指が羊皮紙から移ったインクで汚れていた。服や顔まで汚れていないかも気になるとこ 枕にしていた羊皮紙がくしゃくしゃに成 り果てていたので慌てて皺を伸ばす。 代官から送られ

「姫殿下。 食事の前に、沐浴をなさったほうが宜しいようですね」

服もしわくちゃになっていた。顔や体もべたついて気持ちが悪い。

ろだ。そう思って見ると、

「すまん。そうする」

部下の忠言を受け容れ、 ピニャは降参とばかりに諸手を上げた。

ます。晩餐はデュシー侯爵家令嬢の誕生お祝いのパーティーです。午餐と晩餐の間に時間がありま るそうです」 すので、 「本日の予定ですが、大きな物としては午餐を元老院のキケロ卿と一緒にされるお約束にな シャンディーとの面談を入れておきました。 白薔薇隊長の後任人事について意見具申があ いって

ンディー・ガフで決まりじゃ駄目なのか?」 「パナシュとシャンディ ーは姉妹の契りを交わした仲だったろ? ならば、 白薔薇隊の隊長はシ

ころではないですか?」 「彼女としては白薔薇隊の隊長に就任するよりは、 パナシュと一緒にアルヌスに行きたいというと

通りなら許し難いが、 す我が儘と言えるからだ。どんな意図でそんなことを言い出したのだろうか? 留守を守ることこそがシャンディーの役割である。それを今更嫌だというのは隊の習慣と規律を乱 「今日はキケロ卿に、スガワラ殿をお引き合わせしなければならなかったのだな。それと、 家のパーティー。うんうん」 ピニャは理解できないとばかりに切れ長の美しい眉を顰めた。 いずれにせよ会ってみれば分かるだろうから判断は後に回すことにする。 姉と呼ぶパナシュの信頼に応えて ハミルトンの言う デュ

- 2. 炎龍編 -

は親族を代表して侯爵よりスガワラ様にお渡ししていただきます。 けましたか?」 「デュシー家のパーティーには、 第一陣返還希望名簿に名を載せた捕虜の親族が集まります。 名簿の草案にはお目通しいただ

彼の地にて、斯く戦えり

たかな? 昨晩確認した。 一名分あけておいた理由が思い出せない……」 それでなんだが十五名定員のところに、 十四名しかなかったのは何故だっ

ドサドサと土砂崩れを起こして床に散らばっていく。 ピニャは机の上に積まれた書類の山から目的の紙の束を引き抜いた。 途端、 Щ 積していた書類が

自衛隊

急ぎ拾い集めようとする皇女を制して、 ハミルトンは書類を整理しつつ拾い始めた。

8

第一陣の名簿に載せます」 ご家族はおられませんが、

れともまだ頭の回転数が上がらないかのどちらかだろう。 ピニャは頭をかかえるようにしてハミルトンの言葉を反芻していた。 記憶容量が一杯なの か、 そ

「大丈夫ですか? お疲れのようですが」

「大丈夫じゃないと言ったら、代わってくれるか?」

「無理ですね」

「ならば、菱が頑張るしかないだろう

したのだった。 ピニャはため息混じりに紙の束をハミルトンの胸に押しつけると、 沐浴するために執務室を後に

支度として考えるならば、これでも結構速い方になる。 ャが食卓に姿を現すには、 沐浴をして紅い髪を結いあげ、 ハミルトンに起こされてから一時間ほどの時を必要とした。 薄い化粧をし、衣類をまとう。これだけの身支度を済ませたピニ 貴婦人の身

に火で炙った干し肉を入れたもの、 それでも菅原浩治はピニャが姿を現すのを待たずに、先に朝食を摂っていた。 そして柑橘系の果物だった。 メニューは小麦粥

い。 いる。食事の支度も、こちらの正装であるトュガの着付けもしてくれる。だから困ることは一切な ピニャの館には、召使い……所謂メイドさん達が大勢居て、彼に不自由がないようにしてくれ ただ、仕事だけは、 彼女が居ないと全く始められないのだ。

おける人脈を広げることである。人の縁を結び、 の下準備として語学を磨き、帝都の統治機構における人間関係の機微を把握するのだ。 ャの紹介が必要なのだ。外務省から特地問題対策委員会に出向している菅原の仕事は、この帝都に 外交とは相手と会うことで始まる。 この帝都に知る者のない彼にとって、誰と会うにしてもピニ 後からやってくる本格的な交渉団が活動するため

「おはようございます。殿下」

「おはよう、スガワラ殿。そなたは相変わらず早いな

らでも反応が悪くないので婦人に対する挨拶に付け加えている。 しさを賞賛する言葉を添えた。これは彼がフランスに留学している時に身に付けた習慣だが、 あんたが遅いんだよ、という言葉を飲み込んだ菅原は、 職業的な笑みを浮かべながらピニャの

る限りでも胃の負担を軽くするように作られた朝食を、 く呟きが物語っている。 ピニャは食卓の前に座ると、出された小麦粥をほんの一口と、果物のみを食べるだけだった。 ことさら少量に抑えておく理由は、 後に続 見

足りない」 「今日は、 キケロ卿のところで午餐、 晩餐はデュシー家。 はっきり言って、 胃袋がいくつあっても

来ているので大いに同意できることであった。 「我が国にも腹も身の内って言葉がありますよ。腹を庇ってばかりいられないのがこの仕事だと分

かってはいるのですが、結構きついんですよねぇ」

特に女性の場合は、肌とかスタイルとか美容面への影響も少なくない

よかったら取り寄せましょうか? 菅原はいろいろと気にしている様子のピニャに、 と付け加えて。 我が国には良い胃薬がありますよ、と告げた。

「それは是非。ありがたい。本当にありがたい」

は言えないのである。ただこちらでは、出された料理はひと通りは手をつけることが礼儀とされて いるので、 はないのかと思う向きも多いが、我が国だって、パーティーに料理と酒は不可欠だから他人のこと 帝国では、宴席ですることは話すことの他、食べることと飲むことに集約されてい それがきついのだ。 る。他に娯楽

案の定、キケロ邸の午餐には、 豪華な食事が並べられた。

山羊を丸ごと焼いたものとか、 獣肉、 しかしそれにしても種類と量が凄い。 野菜がふんだんに使われていた。果物は氷雪山脈からとってきた雪に冷やされて美味し 魚と野菜を鍋に溢れるほど詰め込んで煮込んだスープとか、鳥、 食べることが客側の礼儀なら、 これを迎える側は、

食べきれないくらいの料理でもてなすことが歓待の証とされているのだ。 このような歓待を受けることが出来るのも、皇女ピニャが仲介に立っているからだ。もし、

優れた弁舌と政治力が評価されて、今では元老院議員に任ぜられ政界の重鎮役を担っている。元老 院にはマルトゥス本家の者も在籍するため、混同を避けて彼を指してはキケロ卿と呼ぶ。 が一人でのこのこやってきたら、頭から水をぶっかけられておしまいだったろう。 キケロ・ラー・マルトゥスはその名が示すように帝国開闢以来の名門マルトゥス家の流れを汲む 家柄としては傍流であったため、どうにか貴族の末席を占めているに過ぎなかった。しかし、

従って皇帝陛下の大権下に、帝国の総力を結集して可及的速やかに軍事力を再建すべし。 アルヌスを占拠する蛮族を武力でもって追い出すべし」という意見の持ち主なのである。 これに相対するものが講和論・元老院派である。こちらは「今回の無謀な戦争は皇帝の指導下で 今回の戦争について彼が与するのは、主戦論・皇帝派である。つまり「現在は非常事態である。 そして、

例えば講和などの方法も探るべきだ」とする意見である。 スを占拠する敵に対しては、 始まったのだから、皇帝の権力を弱めて元老院の集団指導の下、 『門』の向こうにお引き取り願うにしても、 軍事力を再建する。また、アルヌ 軍事力とは別の選択肢

そのキケロを交渉の相手として選んだのは、彼が主戦論者の中では比較的話が通じるタイプだと たからである。

和論者は何も言わなくても講和に乗って来るものだ。だが、

いかんせん数が少ない。

皇帝の意

10

崩して講和論の勢いを増すことこそが、講和交渉を進める上で必要となる。 思決定に影響を及ぼすには、やはり大勢を動かしていかなくてはならない。 従って主戦論者を切り

12

ケロという人物を選び出したのである。 菅原はそんな説明の下で、誰かを紹介してくれないかとピニャに求め、 彼女は前述した理由でキ

「キケロ卿。こちらをご紹介したい。ニホン国の外交を担当するスガワラ閣下だ

かったので、大使扱いされてもあえて訂正せずそのままに聞き流した。 いろいろな都合で、菅原の身分を勝手に格上げするピニャである。 菅原もピニャの心遣いだと分

「はじめまして」と互いに挨拶を交わす。

たかな?」と尊大な態度で語りかけた。 キケロは「失礼ながらニホンという国について、 あまり存じ上げていない。 どのような国であっ

出身でもなければ、知らない国があってもおかしくはない 成していないものも含めると百余りの地域と外交関係がある。元老院議員であっても、 帝国は強大な国だ。周辺の諸侯だけでも十数ケ国。 外国 日や属国、 のだ。 辺境の諸部族といった国 外交官僚の の体

「そうですね。四季があって森や水の綺麗なところです」

これを聞いたキケロは小さく嗤った。彼の細君も、 馬鹿にするような視線で肩を竦める

には何もありませんと言っているようなものだ。 文明の遅れた蛮地からの使者がどんな国だと問われて、森や水の美しい国と答えるようでは、 パッと見では切れ者のようだが、 所詮は山出し

田舎者。 るキケロは、軽率に突き落とした菅原の評価を、 や、彼の属する国が遅れているのであって、彼個人は悪くない。常に公正でありたいと自戒して ……つもりである 語学力も帝都の貴族を相手に弁舌を振るうにはまだまだ。キケロは菅原をそう評した。 少しばかり持ち上げることでバランスを取った いい

が彼女は仲介者である。 思わずため息が出てしまう。 これを横で見ているピニャは、 外交の当事者ではないから口を挟まないようにしていた。 「注意めされよ。もうやられていますぞ」と囁きたくなるのだ。 キケロの胸中が透けて見えるようだった。

「我が国の産物を手土産として持って参りました。ご笑納いただければ幸いです」

自の直 このあたり実に手の込んだ演出である。 江二等陸曹が、 ピニャの従者達の手を借りて、手土産の入った箱を運び込んで来た。 彼が指を鳴らすと、従者役兼護衛として随伴して

せてしまうほどだ。 冷笑していたキケロ夫妻の表情がだんだんと変化していく様子は、 ピニャをして思わず頬を綻ば

天皇陛下に対して「世界中の婦人の首を、 朱の美しい金沢の漆器類、 ない便利な文房具。 の残る志摩の養殖真珠。 キケロ い金沢の漆器類、螺鈿の細工物、錦絵の鮮やの前に積み上げられる友禅染の見事な絹布、 金銀鮮やかなカトラリー 関の刀工が打った日本刀。そして和紙、 錦絵の鮮やかな扇子、薩摩切子のガラス杯。職人 コレで絞めあげてみせましょう」と豪語したという伝説 に、 陶器、 金糸銀糸で彩られた京都西 磁器の食器等。 洋紙、 ペン等一度使ったら手放せ 陣織の反 物 が時の

物作り日本を代表する工芸と実用の逸品揃いである。

儛らせ、そして隙を見せた途端に切り込むやり口にやられない者はいなかった。 ピニャはここ数日の菅原のやり方を見て、謙遜から入る彼のやり方を鮮やかな物だと思ってい

と技術によって作られたかが理解できるのだから。 い訳にはいかないのだ。贅沢に慣れた貴族だからこそ、 帝都でも入手不能の美しい品々を見せられれば、誰だろうと日本とはどんな国だと思う。 目の前に積まれた品々が、どれほどの手間 思わな

られたように見つめていた。弁舌を専らとする政治家とは言えやはり男である。 うであった。 キケロの細君は、色鮮やかな西陣や友禅に関心を奪われ、キケロは日本刀の鮮やかな刀身を魅入 武具に目がいくよ

「素晴らしい。これらはニホンから?」

「全て、我が国の職人の手によるものです」

見抜く鑑識眼と、文化に対して敬意を表すことができる素直な姿勢は尊敬に値すると言えるだろう。 しかないのかと思ってしまいますぞ。さあ、教えて下され。ニホンとはどのような国でしょう?」 「しかし、スガワラ閣下もお人が悪い。森や水の美しい国などと言われては、自慢するものがそれ 「ニホンとは、どれほどに優れた国であろうか? キケロは、ここで態度を改めた。尊大な態度もなりをひそめて相応の敬意を示す。 ピニャは思わず額を抑えた。 また、 やられている。 いや、失礼した。侮っておりました」 優れた文物を

ここで、胸襟を開いて心の防備を解いた途端……。

「我が日本は、帝国とただいま戦争中です。場所は『門』の向こうでございます」 キケロはあんぐりと口を開いたまま閉じることが出来なくなっていた。

後の交渉が、菅原のペースで進んだのは言うまでもない。

詰った。 キケロは、主戦論・皇帝派という自らの説を固持し、突っ張るだけで精一杯となっていた。そし 敵の使者をここに連れてきたピニャの行為を、売国とまでは言わないが、それに近い行為だと

徴募した兵数が十万になるとか、 を口にしたほどである。 そればかりか、 精神的劣勢を覆すために再度『門』を越えて日本を征服すると、威勢のいいこと 軍の再建も着々と進んでいて、あと数ヶ月で完了するだろうとか、 本来なら伏せておくべきことまで喋ってしまった。 新たに

は何かにつけて、 ことを意味する。 で成果充分と言えるのだ。これで、今後彼が一人でやってきても門前払いされる恐れはない。 だが、それはキケロが日本という国の存在を認め、そこに住む者が侮りがたい敵であると認めた 少しずつ現実を知らしめていけばいい。 菅原としては、 キケロにこちらを対等な交渉相手と認めさせることが出来ただけ

文字でキケロの細君の妹の息子……つまり甥の名前が記されていた。 菅原が差し出した一枚の紙が、 ピニャを非難するキケロを黙らせる。 そこには、 帝 国

おります」 「うかがった話では、キケロ殿の甥御になられるとか? この方はただいま我が国で捕虜となって

「なんと、生きているのか?」

「まぁ!」

てて彼女を宴席から運び出した。 傍らで聞いていたキケロの妻が、 その嬉しい 知らせに感極まって倒れてしまい、 メイド達があ

いた数名に限って、 「実は、ピニャ殿下に仲介の労を担っていただくことの引き替えとして、 無条件で返還する約束を取り結んでおります」 殿下からご要望をいただ

「無条件だと?」

「はい。無条件です」

「身代金の類は必要ないと?」

「強いて言えば、殿下のお骨折りが身代金に相応することとなりましょう。 あくまでも殿下 お  $\Box$ 

添えのある数名と限らせていただいておりますが……」

この一言は、 ピニャの立場がなくなるような言動はするな、 という意味をもってキケロの 耳に

受け容れやすかった。 ピニャは捕虜の命を人質に仲介者として働かされているのだ。そう考える方がキケロにとっても ならば仕方のないことである。 売国行為と詰ったのは間違いだ。 彼女は貴族

の子弟を守るために、我が身と名誉を犠牲にして働いているのだから。

容れても良いのである。 キケロも大いに拒絶しただろう。だが、相手がピニャに求めたのは交渉の仲介でしかない。どのよ うな相手だろうと、どのような状況だろうと、 これが「捕虜を返して欲しくば、講和に応じろ」、とか「負けを認めろ」というような話だったら、 交渉すること自体は悪いことではないのだから受け

決めるのだ。 戦論者たる身でも彼女の邪魔は出来なかった。しかも、自分の甥が帰って来るかどうかはピニャが やらも、ピニャと日本との交渉次第で、 仲介者たる彼女の活動を邪魔すれば、 多くもなれば少なくもなるのだろう。とすれば、いかに主 捕虜が帰って来れなくなる。 また、返還される数名の枠と

彼女の手を取った。ピニャも表情を穏やかにして頷く。 キケロとしては、 ピニャの袖にすがってでも頼みたいところである。 だから、 彼は何も言わずに

知らせが届きましょう」 「実は、今宵デュシー侯爵家令嬢の誕生お祝いのパーティー があります。 後刻、 こちらにも招待の

「失礼だが、何をおっしゃられているか分かりかねますが? デュシー侯のご令嬢とは面識もあ ń

嬢の誕生祝いを盛大になさることにされたのです。妾はそこに良き知らせを届けたいと思っていま デュシー家には悲しい出来事がありました。その憂いを払おうということで、侯爵はご令

す。ご出席なさりませんか?」

ここまでの話の流れで、ピンとこなければ政治家は出来ない。

18

るかどうかが意思表示になるのだ。 命と帰還のことだ。出席する以上、 おそらくデュシー家の者が『門』の向こうに出征したのだ。ならば、良い知らせとは当然彼の存 キケロの甥のことも期待して良いだろう。というより、 出席す

キケロは恭しく頭を下げると、ピニャの手甲に接吻をする。

「是非とも良き知らせが届くその瞬間に、 私もご相席させていただきたいと思いますよ。

## \*

の群れも、 帝都で、 数ヶ月という短い期間にもかかわらず大きく様変わりしていた。 外務省の菅原がその活動に本腰を入れ始めた頃、アルヌスの難民キャンプたる仮設住宅

従者達(その全員が女性だが……)の滞在場所として選ばれたことに始まった。 それは、 帝国皇女ピニャ・コ・ラーダから語学研修生として派遣されてきた騎士団の隊員とその

望していた。 彼女達はピニャが夢見心地の表情で熱く語った、摩天楼と芸術で溢れた都市での研修を希

その国の言葉を片言も話せないのに海外留学することが無謀であるように、 いきなり東京

で受け容れるのも乱暴な話である。まして警護にはじまる諸々の事情もある。 いはこなせるようになるよう、日本政府はアルヌスの難民キャンプでの教育を施すことにしたので そこで日常会話くら

こうすれば、 日本側も受け容れの準備にも時間をかけることが出来る。

勢いで日本語を修得している子ども達も多く住んでいる。日本語を学ぶだけなら、 いるかも知れない。 それに、ここには 『特地語』←→『日本語』通訳の権威となりつつある賢者や、 それに追随する 東京より適して

良いのである。 うになっていたし、さらに外務省の官僚もここで特地の言葉を学ぶ予定なので、 日本側の人材としても、 伊丹耀司ら陸上自衛隊各偵察隊の面々が特地の言葉をある程度解せるよい いろいろと都合が

だが、倍以上に増える人口を支えるには、どう見ても棟数が足りない。

そこで臨時の予算が組まれ、仮設住宅よりはちょっとマシな造りの建物が並べられることになった。 省の官僚も難民が仮設で暮らしていて自分達がテント暮らしなんてまっぴらゴメンだと言い出した。 はもっと大きいということで、インフラの充実がとても強く叫ばれたのである。それに加え、 部屋に相部屋というのもストレスの大きいことだ。それを正面からぶつけられる従者達のストレス さらには井戸を掘って浄水設備を置き、 いくら露営の訓練も受けているとはいえ、騎士団に属するような高貴な女性達にとっては、 排水路を敷設し、 浄化槽等の下水を完備し、 これらを動

源として確保されたから誰からも文句は出 ついでに、これまでの生活必需品の無償配給も終了することにした。 ない。 翼竜の鱗が避難民達 の収入

活組合への委託である。 らも各種の消耗品等を扱う商店が設けられることとなった。もちろん、 遠く離れた町まで買い出しに行かないといけないというのも不便である。 その運営はアルヌス協同生 そこで小型なが

きが必要な銀座よりも、 った。というのもこの商店が『PX(駐屯地購買部)』と呼称されて、 難民のお年寄りや子ども達がの 便利に立ち寄れる店として見られてしまったからである。 んびりと店番をしている風景は数日と保 出入りの都度に煩雑な手続

避難民達には、店を大きくしようという気はなかった。

思っていただけである。 ヌス協同生活組合を大きくするつもりもなかった。 全ては、 自分達の必要を賄えれば良い

の消耗品などの一切)を快く出してくれた自衛隊に渡せば良いと考えていたのである。 の再建費用として、幾ばくかの蓄えを作り、あとの残りは事業の元手 鱗の販売事業とて、 自分達が消費するのに必要な食糧や衣服を買い、 (防毒面とか、 V ずれ コダ村に帰村

ドもやってくる。 菓子類等が飛ぶように売れた。 PXの買い物客は増えた。騎士団に所属する貴族の令嬢がやってくる。 彼女たちには、 『門』の向こうから運ばれて来る日用雑貨、衣類、 そのお付きのメ 茶などの嗜好

は東京から送られてくる日用品だけでなく、イタリカで仕入れた、ありふれた民芸品が土産として これまた売れた。 語学研修の外務官僚もやってきた。そして、 アルヌスの丘にいる自衛官達もやってきた。 彼らに

店が客であふれかえり、スペースが足りなくなった。

手が足りない。荷出しに手が足りない。 店舗の増築。 要望を受けて品数を増やす。だが販売数が増える。 仕入れに手が足りない。 販売に

品のカタログ……主に婦人用の下着等とかを見ることが出来、 **うメリットがあった)** る女性数名が手伝いを申し出てくれた。(この背景には、『門』の向こうで売られている珍しい こうして、子どもや老人がてんてこ舞いしているところを見かねたのか、 自分が欲しいものを発注できるとい 貴族のお嬢様の従者た

ます手が足りなくなるという悪 ……わずか数日で、専従のスタッフを雇う必要が出来てしまったのである。 これがまた、若き男性たる自衛官達を引き寄せることになってしまう。客がさらに増えて、 (?) 循環。 手伝いの女性達も本業を疎かにするわけにも かず

人の雇い方はコネクションが主流だ。 ハローワークもないし、 人材紹介サービスもな

22

を紹介して貰った。そしてやって来たのは猫耳の女性達だった。 り前かも知れない。こうして悪循環が加速する。 して、彼女達のような亜人をハウスメイドとして雇用しているくらいだから当たり前と言えば当た アルヌス協同生活組合は、商取引で関係を深めつつあるイタリカの フォルマル伯爵家では貧困対策と フォ ル マル伯爵家を通じて人

さらに悪いことは重なる。

力があった。竜の鱗を仕入れようと、商人達が次々とアルヌスを訪れる。そこで彼らが見た物は、 『門』の向こうから取り寄せられた珍しくも貴重で便利な品々。 竜の鱗は扱いの単価が非常に高くて利幅も大きい。そのために、各地の行商人を招き寄せる魅

るアルヌス協同生活組合も、断り切れなくなってしまったのである。 品を大量に仕入れたいという粘着質な要望に(泥棒する奴も出た)、 **入達が飛びつかないはずがない。飛びつかないようなら商人たる資格はない。こうして、これらの** 例えば、 『紙』だの『鉛筆』だの、伸縮性のある生地で作られた衣服だの……といったものに商 お年寄りと子どもの集団であ

業に送りつける。 レレイは、ため息をつきながらも日本語で注文書を書いて伊丹に託し、伊丹が東京の問屋とか 売っては仕入れ、 また売るという繰り返し。 いっそのこと、 電話回線を引いてF

前向きに検討中である。 AXを置こうという話も出ている。 一部外務官僚からは光回線を引いてくれという希望も出てい

そして気が付いてみると、その経済活動の規模はとっても大きくなっていたのである。

する羽目になった。 外で危険な野宿と野営である。 なのだ。何しろ、 利益が大きくなってしまえば、また商人が集まってくる。だが、あんまりやって来られても迷惑 宿もなければ食事を出す店もないのだから。集まった商人達は、難民キャンプの 当然悪事を考える奴も出てくる。そのために、 警務隊が交代で常駐

きた。 傭兵を雇うことになる。 いといけなくなって、隊商を送るなら護衛も必要になる。流石にそこまでは自衛隊に頼めないので、 商人達に来ないようにしてもらうには、商品をこちらから運ぶしかない。 そうすると彼らが寝起きする場所も必要で、 また建物を増やす必要が出 その為には人を雇 わ

た客が増えたりして、 村みたいな食堂をつくって料理人を雇う。 手配して建物を建てることとなった。こうして集まったドワーフの職人とか大工、それと組合で雇 ての従業員が必要になって、またまたフォルマル伯爵家を通じて人材を紹介して貰う。 った行商人、ちょっと荒くれた感じの傭兵達……彼らに食事を提供する場所が必要になって、 ここまで来ると「また、 店が夜間も稼働し始めると自衛官達も客として来たりする。 仮設住宅を建てて」とおねだりもできない 料理人が色気を出して酒を出したりすることを始めてま ので、自分達で大工や職人を 酒を出す店とし すると来た

のは、 やっぱりウサ耳とか狐耳とか、犬耳とか……獣系の娘達だったりする。

かアルヌスの街と呼ばれるようになったのである。 があって、しかも特地と日本文化が混ざり合ってアナーキーに発展中……こうしてここは そんな感じで、 アルヌスの難民キャンプは、 いろいろな種族が流れ込んで来る、 上げ潮的な気配

7 \*

数ヶ月前は人口三十名に満たない難民キャンプだったと誰が信じるだろうか? 日中は槌音とノコギリの音が響いて、弟子を叱咤する親方の声が時折轟 ヌスの街は賑やかになった。そして更に賑やかに成りつつあった。 いたりする。

荷物を満載にした商人の荷車が盛んに出入りし、それを護衛する傭兵達が装備のぶつかり合う金

また帰って来るという風景が、

もう当たり前のものとなっているの

どこから潜り込んできたの か、 行商人が勝手に露店を開い てい る。 見ると民芸品とか、 どこで拾 属音を響かせながら外へ行き、

「ちょっと見てかない?」と声をかけていた。

ってきたのか分からないような宝石貴石の原石を並べ、

戦闘服姿の自衛官とか、

メイドさんとかに

陽が沈む頃合いになると、 屋台村のような店のまわりで薪が焚かれ、 闇の中に明るく浮かび上が

ඉ

衛兵とか、 中で、泡立つビールジョッキを片手に乾杯しているのである。 トとか、PX勤務の猫耳娘とか、 オープンカフェよろしく二十くらいのテーブルが並べられ、 職を求めてやってきた傭兵とか、行商人とかが、自衛官達と肩を寄せ合うほどの狭さの お嬢様付きのメイドさんとか、組合で雇ったヒト種の商人とか護 そこに太ったドワーフとか、 ホビ

もちろん、 奥の方では、 それぞれのテーブルもにぎやかだ。 筋肉質の白髪のおっさんが、料理をして威勢のい い声で注文を受けていたりする。

下ろしている。 あるテーブルを見れば、元兵士っぽい男が、 男はホッとした感じの息を吐いて、テーブルの上に剣をどちゃっと載せた。 腰から剣を外しながら木製の椅子にどっかり

「おいっ、面接どうだった?」

「おいよ。 なんとか護衛の仕事にありつけた。イタリカと帝都間の交易路の護衛だとよ

結果を述べた。 正面に座っていた髭男が、 ジョッキ片手に身を寄せてきたので元兵士っぽい男は破顔して、

耳姉ちゃんに「ここじゃあ、エールなんて喉を潤すために、まずは一杯とばかりに

エールなんてもん扱ってないよ。

ビー

ルならあるけどねっ!」と言わ

「おいっ、

エー

ル!」と注文する。

ところが、

店のウ

れてしまう。

ゲート 自衛隊 彼の地にて、斯く戦えり - 2. 炎龍編

そこまで言うならと不承不承ながら注文する。そして出てきた冷えた泡麦酒を口にして一言。

「美味いっ!」

「イタリカ往復の隊商護衛は今のところ全部で八個隊がある。 俺と一緒ならいい な

声を低くした。 「もし一緒だったらよろしく」と、 二人の男は握手を交わす。 すると、 髭男は辺りを見渡し てから

「前は何してた?」

俺は身が竦んだぜ」 「折角仕事にありつけたっての だ、 んなこと言えるかよ。 イタリカを襲った連中の末路を聞

「で、真面目に職探しってか? へつ へっし

「心を入れ替えて真面目に生きるのが 一番だぜ」

「そだ、そだ」

ぷの良い声が割り込んだ。 などという会話を交わしていると、 「なんだい、 大の男が内緒話なんてしちゃってさぁ」

「はいよっ、お待ちぃ」

っとと喰え」とでも言わんばかりにテーブルにデンと置いた。 ウサ耳の姐さんって雰囲気の女性が、 大皿に盛りつけた肉や野菜を、 粗野な感じの髭傭兵が、 彼らの頭越しに 魅力的な曲 「ほ 5

線を描く彼女のおしりに手を這わせて、 回し蹴りをくらって吹っ飛んでい

来やがれってのっ!」と、 撃で昏倒させられた傭兵を見て、間抜けな奴だとみんなが笑い、 拳骨を震わせた。 ウサ耳の姐さんが 「おとつい

切ったタンカが、 「あたいの尻はね、 安くないよっ!」である。

をかましながら伊丹がやって来る。 そんな中、「よお、デリラ。 いくら払えば触らせてくれるんだい?」などと不埒なセクハラ発言 黒ゴス神官のロゥリィ・マーキュリーや黒川二曹、 桑原曹長も

と両手で顔を覆うと店の奥へと逃げ去ってしまった。そこへ「イタミの旦那! てますぜっ!」と料理長をしている白髪のおっさんが声をかけた。下にも置かない待遇だ。 すると威勢の良かったデリラも、 顔を真っ赤にして「イ、イタミのだんな。 嫌だあ、 奥の貴賓席 もう が空い つ

「いいよ。ここがいいんだ」

ルを置くようになったのだ。 来の食堂はそっちだった。だが利用者の急増によって、 屋台村とは言いながらも、 一応奥には屋根と壁で囲まれた食堂スペースがある。 客が入りきれなくなり、 食堂の外にテーブ というより、

するためのスペ 現在は貴賓席と呼ばれて、 自衛隊の幹部連中専用の場所という扱いになっている。 ースだ。 元から居た難民とか、 外務省派遣の官僚連中とか、 要するにお上品に食べたり飲 騎士団のお嬢様方 ぶんだり

28

噪が好きなのでこちらを利用するようにしていた。

「で、話ってのは?

が多い の隣だ。このメンバーでは、第三偵察隊とその関係者の人事や人間関係について話し合われること 伊丹が座り、 その向かいに黒川が腰を下ろす。 ロウ リィは伊丹の隣で、 桑原のおやっさん は黒川

た。 んで出てこないデリラに代わって、ドーラという狐耳ふわふわしっぽ娘が注文をとって去ってい ロゥリィがとりあえずということで、 全員分の生ビー ル 大ジョ ッキを注文する。 0) 奥に つ

届いた大ジョッキを、 一口あおってから黒川は低めの声で言い放った。

「もちろん、テュカのことですわ。いつまで放っておくおつもりでしょうか?」

渡している。 ふと、黒川の背後に視線を向けると話題のエルフ、テュカが小走りに駆け寄って、 見るからに『誰か』を捜している様子である。 店の様子を見

「テュカぁ! 何をしているのぉ?」

ロゥリィが声をかけた。

うん。 ちょっとねぇ」

「誰か人捜しいかなぁ?」

「えっ?」

「もしかしてぇ、男だったりぃ?」

いているのです」と告げた。そして、伊丹にどうするつもりなのかと重ねて尋ねた。 それを見送った黒川は「ああして、毎日これくらいの時間になると居るはずのない

テュカは「違う違う」と手を振ると、苦笑しつつ屋台村から去っていった。

のある風景なのだ。 た。外見は少女の彼女が生ビールをあおっているというのは、 く屈辱的だったのも確かで、それと同じように彼女も感じていることに気付いて胸中複雑である。 いされてしまった。そりゃ九百歳過ぎを前にしては、 隣では、 桑原が目の前の黒ゴス少女がジョッキを口に運んでいるのを眺めて、ため息をついて だが、 かつてそのことを指摘したところ、ロゥリィからこっぴどく『坊や』扱 いかに五十歳でも子どもだろう。 良識派の桑原にとって非常に抵抗感

無理矢理現実を認識させる必要、あるのかしらぁ?」

嘯くように言うロゥリィに、 看護師でもある黒川は強く言い放った

「あるに決まってます」

思い込んでいるのではないのぉ?」 「そうかしらぁ。 現実を受け容れることが出来ないからこそぉ、 父親が生きていると必死になって

「それは逃げですわ」

「逃げてはいけないのぉ?」

30

ません。いえ、誤魔化せば誤魔化した分、『明日』は過酷なものとなるでしょう。テュカのお父様 ょう。そのことをしっかりと受け止めなければ、 はここにはいないのです。 て生きて行くことが出来るのですわ。現実の否定で、 「いけないに決まってますわ。 『今』という時を消費するだけの毎日になってしまいますわ」 多分……おそらくあの焼け跡から見ても……もう亡くなられたことでし 人は、 現実をしっかりと見つめて、受け止めてこそ、 彼女が、それを認めなければ、 『今』を誤魔化すことは出来ても、明日は来 現実と妄想の狭間 明日を目指

せたらいいだろうと思い悩んでいるかのようにも見えた。 背中は、 ロウリイ 正論と理屈を並べる子どもを前に「人生はそれだけじゃないんだよ」と、 は肩を落として疲れたような息を吐くと、手にしたジョッキの 中身を飲み干 どう言い聞か した。

いる。だが、それは『正しい』というだけなのだ。 黒川が考えているようなことはロゥリィも考えていたことがある。 いや、 正しいと今でも思って

正しさでは人は救えない。

知るからこそ、どう語ればよいのかと、 とが出来ずに、 黒川の今立っている場所は自分も通ってきた道だった。そして、 結局のところ自分で悟るしかなかったのだ。 悩むのである。 痛い思いと共に……。 誰に言われてもそれ それを我が身で と気付くこ

口を開いた。

と言い聞かせて、 黒川。俺たちが、よってたかってテュカを取り囲んで、みんなでお前の父親は死んだんだ 現実を認めさせたとしよう。そうしたらどうなる?」

受け入れて生きていきますわ。 死者を思い描いて生きるだけでは寂しすぎます」 「どうなる? 『喪の仕事』と呼ばれる悲しみの期間を過ごして、やがて父親が亡くなったことを 彼女の人生は私たちのものより長いのです。 永遠に近い時を、

「それはぁ、確かにそうなんでしょうけどねぇ」

思っていた。答えは未だに出ていない。きっと出ないだろう。 来ると思うのは傲慢と思う。と、 そして必ず訪れるそれらとの別離。自分は乗り越えることが出来た。だからといって、 ば長いし、短かったと言えば短かったしぃ……と呟く。九百六十年の間に出会ってきた親しい者達 ロゥリィは頭の後ろで手を組むと、星の瞬く天を仰ぎ見た。 同時に他人には出来ないと決めてかかるのは不遜ではない 九百六十年かぁ。長かったって言え 他人にも出 かとも

よいよ『あっち』の方向に行ってしまわないとどうして言えるんだ?」 現実と妄想の狭間で生きているが、現実を突きつけることで、 お前の言うようにしたとしよう。テュカは、悲しみを受け止めきれると思うか? 決定的に現実から目を逸らし て、 V

『正しさ』は劇薬に似ている。 その言葉にロゥリィは驚いた。 人を絶体絶命の窮地に追いやることもあるのだ。 誰をも黙らせる力があり、 伊丹からそんな言葉が出てくるとは思わなかったのだ。 よく効くからこそ頼りたくなる。 伊丹のような最も現実に背を向けている だがそ

う男、 男が、 どうしてそのことを知っているのかと思うとロゥリィは思わず苦笑してしまった。 以前から興味深くはあったが、ますます興味を感じる。

「そ、それは……」

命令が出たらどうするよ?」 テュカの『こころ』に寄り添い続けてやれる立場じゃないんだ。今日真実を突きつけて、 は彼女を支える力があるのか? 「大丈夫だと言い切れるほど、 お前はテュカのことを知っているのか 俺たちは臨床心理士でもなければ精神保健福祉士でもないんだぞ。 ? 俺たちは、 そしてお前に 明日撤退

「……つまり、 このままにしておけとおっしゃる のです ね?

伊丹は、 悪いことは言わない。最後まで責任を持てないなら何もするな。 冷たく黒川に言い放つのだった。 余計に拗れるだけだ」

桑原が付き添っていった。 いる。その支度があると称して、 第三偵察隊は、 帝都に滞在している外務官僚への連絡任務のために、 黒川が腹立ち混じりの表情で中座し、 隊舎まで送るということで 明日出発することになって

残された伊丹とロゥリィは、差し向かいで飲み続けていた。

「飲みなさいよぉ。お馬鹿さぁん」

ロウリイが、 伊丹にもっと飲めと、 ジョ ッキを突きだした。 伊 丹は、 苦笑しつつ自分のジョ ッツ 丰

をコッンと合わせる。

断崖絶壁急転落ねぇ」 「あんな言い方する必要なかったんじゃなぁい? 随分と冷たい感じい。 クロカワからの評価は、

「誰にも彼にも優しくできるほど、懐が広くないんでね。 仕方ないよ

「ふ~ん、その懐の定員は少ないのねぇ」

そう言いつつも、 ロゥリィは内心では「嘘つきぃ」と呟いていた。

「上手く行かなくて残念だったな」で、終わらせることも出来るのだから。 この男、 わざと冷たく振る舞ったのだ。黒川の好きなようにやらせてみて、 最悪の結果が出ても

「一人か二人が精一杯かな」

「一人にしておきなさぁい。 または、 一人だけだと思わせなさぁ い

「どうして?」

「女にモテるからよぉ」

「優しくないとモテないんじゃないのか?」

「逆よぉ。女から見て、 誰にも彼にも優しくする男ってぇ……そうねぇ、 男から見たらぁ……誰に

でも股を開く女に似てるかもぉ」

「はぁ?」

「優しさに飢えている時はてっとり早くて都合がいいけれどぉ、 伴侶にしたいかって言うとお、 ち

なのよぉ」 よっとねえ。 優しくしてもらえるのが一人だけならぁ、 その一人だけの座が欲しいって思うのが女

徒の一柱で死神なんておっかないアダ名がついてる癖に」 「ふぅん。そんなもんかねぇ……ロゥリィ は優しいな。 死と断罪の 神様エムロイ だつけ? その 使

とを尊ばなければならない。どうでも良いような人生の果てにある死は、 終焉、どのように死ぬかは、どのように生きたかを意味するわ。最良の死を迎えるには、生きるこ てるのよぉ」 「あらぁ? 誤解があるわねぇ。 死を司るということは、 生を司ることを意味するの。 どうでも良い死に成り果 死とは生の

「そうなのか」

ロゥリィは「そうよ」と微笑むとジョッキの 中身を飲み干した。

「おかわりっ!」

「いやぁよぉ。優しくしてよぉ」 「おいおい、そのへんにしておけよ。 酔 つ 払っ ても知らないぞ\_

「けちぃ」

「じゃ、とりあえずは、

寝床までは運んでやります」

ロゥリィのつま先が伊丹の脛を蹴った。

ってえなあ、 もう!」

脛を撫でる伊丹を指さして、 ロゥリィは鈴を転がすように笑う。

そんな二人のやりとりに、ハスキーな女声が割り込んだ。

「なんだここは? まさかとは思うが卑劣なことを考えているのではあるまいな?」 ガキに酒を飲ますのか。それと、そこの男、 幼気な少女を酔わせて何を目論ん

突然、その場が水を打ったように静まりかえった。

喧噪が途絶え、 灯火の薪がはぜる音だけが、 響いている。

スでは、 荒くれの傭兵連中も、 絶対に口にしてはいけないとされている言葉を吐いた強者の姿を盗み見ようと、 無骨なドワーフも、 顔面を蒼白にして黙り込み、 少なくとも、 ゆっくり

と視線をめぐらせた。

くすんだ白のターバンを巻いた痩身の男……

11 か

女か。

褐色の肌に、銀髪。そして長穂耳。

それはこの世界にて、 ダークエルフと呼ばれる種族の女だった。

02

「なんだここは?

ガキに酒を飲ますのか。

それと、

そこの男、

でいる? まさかとは思うが卑劣なことを考えているのではあるまいな!」

その女声が響くまで、 ロゥリィはこの上ないほどにご機嫌だった。

伊丹耀司との逢瀬が、 楽しかったからだ。

ずだった……。 って眠りこけたフリをして見せれば、 雰囲気もまずまずだし、ビールも美味しい。このまま伊丹を際どい冗句でからかい続け、 ベッドまで運ばせることに成功するだろう、 いや成功したは 酔っ払

……眠っているロゥリィ を、 伊丹は壊れ物でも扱うかのように慎重に運ぶ。

彼女の身体を優しくベッドに横たえ、 その頭を柔らかな枕にそっと載せる。

長い黒髪が絡んだりしないようにという配慮で、指先で上手に梳るようにしながら捌き置

神官服には皺をつくらないように、その裾を丁寧に整える。そしてブーツだけは脱がす。

その付け根近くまでが顕わになった。 裏の辺りを支えて、『く』の字に曲げさせた。 伊丹はロゥリィの左足首からふくらはぎをそっと撫でるようにして包み持つと、右手で彼女の膝 当然、 フリルスカートの裾が乱れて、 彼女の腿……

左手で靴紐の先を摘み持って、あたかもプレゼントの箱を開くような面持ちでツツッと引き解だが、伊丹は気付かない。あるいは気付いていても黙殺する。

十分に靴紐をゆるめたら、 ふくらはぎとブー ij の狭い隙間に、 伊丹の指先がい よいよ分け入った。

「……あっ……ん」

その感触は足裏マッサー ジのそれに近くて、 思わずため息が漏れてしまうかも。

くぞ。いいな」と声をかけた。 こうして、靴とロゥリィの素肌との間に充分な空間が開いたら、 伊丹はブーツの踵を掴 んで

目を閉じたままの ロウリイは、 頬を紅色に染めつつも、 頷 V たか頷かない か程度の小さな反応を

見せただけだった。 伊丹にはそれで充分だった。 いや、反応がなくとも伊丹は待たなかっただろう。

「いたいつ……お願 い……乱暴にしないでぇ」 して、それまで漆黒の革靴で隠されていた、白いレースの生地に包まれた足が顕れる。

彼女の左足からブーツを引き抜いていった。こう

た伊丹はもう後戻りしない。やや強引なまでに、

・ツへと手をかけた。 ロゥリィは小さな声で懇願した。だが、 冷酷な伊丹 は 口 ウ IJ 1 の声を無視してい よいよ右足の ブ

……事を終えた伊丹は、<br/> 彼女の部屋から出ていこうとする。 寝台の横には、 彼女のブー Ÿ が

きちんとそろえて置かれてい た。

でも、 彼女の手は、 伊丹の袖を硬く掴んで離さな

「しょうのない奴だ」

とかなんとか言いながら、 伊丹はロゥリィの指を優しく解きほぐそうとするかも知れな い。

きずり込んで寝技へと持ち込む うか、是非して欲しい。そうしたら両手を伸ばして伊丹の頭をがばっと抱きかかえ、 ベッド

にして……。 すなわち、相手を酔わせていろいろ目論んでいたのは口後は、いろいろとムフフな展開を朝まで……と思ってい ロゥリィなのであった。いたのだ。 卑劣かどうかは

なのに、 なのにそれなのに。邪魔したあげく、 このロゥリィ キュリーをガキ扱

ロゥリィは、 震える拳を隠しながら声の主へと振り返った。

見ればダークエルフの女だった。

三百歳前後だろう。 ヒト種で言えば二十代後半から三十代前半の外見である。

見えるのだが、 そうな無地の生地をそのまま纏っていた。だからだろうか、布の隙間から彼女の肢体が微妙に垣間きれを身体に巻いただけなのだ。ある程度の意匠をこらすこともあるが、この女の場合はすり切れ マントンは魔導師のローブにも似ているが、 南方の部族なのか、旅塵を避けるために頭にターバンを巻いて、身体はマントンで覆っていた。 それがまた気に喰わない。 それよりももっと簡素な構造をしている。 ただの布

・ジ鎧を纏っている。 見た感じ、 いかにも肉感的で男好きのしそうな身体なのだ。 しかも、 ダークエルフ特有のボンテ

ジ鎧とは俗称であり、 防具としての分類は革鎧に該当する。 鞣した革に鋲や金具をとり

ザインも、 つけてデザイン性と若干の防御力強化をはかっている。身体にぴったりとした扇情的とも思えるデ 南方に棲むダークエルフの部族は、軽快かつ俊敏な戦闘術を伝承していると伝え聞く。 このような防具が発達したのだろう。 戦闘時の動作の邪魔をしないためであり、敏捷性への負荷が極力少なくなっている。

ロゥリィと伊丹の二人を前に仁王立ちしていた。

っていた。 彼女の右手はサーベルの柄にかかっていて、 すぐにでも伊丹に斬りかかりそうな剣呑な気配を放

たり、斬りかかったりするような理不尽なことをするつもりはなかった。だけど、意地悪くらいは してやりたい。 ついての情報を得ることにした。この容姿だ。 「あなたは、誰ぇ? ロゥリィは、怒るよりも前に、 何しにここにい いや既に充分に怒っているのだが、 ? 間違えることは仕方ないと思う。 その事を表明する前に、 だから、ぶん殴っ

か、その質問に丁寧に応えた。 ダークエルフの女は、 怯えで身体を震わせている(ように見える) 少女を、 安心させようとして

「我が名はヤオ。 こちらに緑の人がおられると聞き、 ダークエルフ、 シュワルツの森部族デュッシ氏族。 用件ありて参った次第 デ ハンの娘、

ロゥリィはその瞳を輝かせた。

背中に隠れて言い放った。 が飲めないのかとしつっこいんですっ!」 「お願いっ、助けてっ! この男、もう飲めません、 許してくださいって頼んでいるのに、 俺の

……もとより静まりかえっていたが、場は更に静まりかえった。

誰かの唾を飲み込む音すら聞こえるほどである。

誰も助けてはくれない。 おっちらと避難を始め、 伊丹は「えっ! オレ?」と自らを指さして周囲に救いを求めるように視線を巡らせる。 伊丹独りがポツンと残された。 他の客達は数人がかりで料理の載ったテーブルを持ち上げると、 えっちら だが、

「やはり、そうであったか」

もかも奪われた上で、ボロくずみたいに捨てられていたんだわぁ!」 れていたら、わたしぃは前後不覚に酔っ払って、明日になって目が醒めたら、 「この男、 女を酔い潰して、 その後で手込めにするつもりだったんですっ! きっと純潔も操も何 あともう少し飲まさ

と両手で顔を覆って崩れ落ちて見せるロゥリィ・マーキュリー。

三昧の男に対する正義の怒りで震えていた。 ヤオはその痛ましく見える姿に「可哀想に、 恐かったであろう?」と慰めた。 その声色は、 悪行

伊丹の目には、 顔を覆う両手の隙間から、 ペロリと舌を出しているロゥリ ィの素顔が見える。 そ

瞳は伊丹に「ゴメンね」と語っていて思わず天を仰ぎたくなった。

きなり目隠しをしてきたりして、叱りつけると「怒っちゃ嫌」と泣いたりする。 の場合で女性側の無言の期待に男が応えない時という。 えることもまた、 ある種の女性は時として、親しい男に対してこういう振る舞いに及ぶ。例えば車の運転中に、 男の甲斐性の内に含まれているのだ。 女性がこうした振る舞い こうしたことに耐 に及ぶのは、

「己の薄汚い獣欲を充たさんとして、少女に酒を無理強いするなど不埒干万。 断じて、 許せぬ」

- 2. 炎龍編

ヤオは伊丹との距離を詰めつつ、ゆっくりとサーベルを引き抜いた。

彼女の右手には見るからに斬れそうな刀身が、 篝火の光を受けて輝いている。

安心するがいい。 今すぐこの不埒者を成敗し、 おまえの安逸を取り戻してやる」

そして、 ヤオは、 再び目標へと視線を向けたのだが、 ロゥリィを安心させようと微笑みながら語りかけた。 その時には座る者の居ない椅子と、 中身のな い

ゲート 自衛隊 彼の地にて、斯く戦えり

ルジョッキが転がっているだけだった。

「は、はやっ」

「ダンナ、見事なもんだねぇ」

一部始終を見ていた観客達を代表して料理長とデリラが呟いた

「あばよ~とっつぁん。飲み代はツケといてくれ」

見れば、 夜の闇の向こうへと伊丹の背中が消えていく。 ちょっと振り返って手を振っているとこ

ろなぞ、 小気味の良さを感じさせるほどであった。

42

のように酒盛りと食事を再開した。 あまりの逃げっぷりに、 一同しばし身動きが出来なかったが、 しばらくすると何事もなかったか

料理長は、カウンターの柱に画鋲で留められている何枚 鉛筆でツケに入れる今回の代金を書き込んでいた。 いかのカ ド から、 伊丹のカードを取り

ン」と咳払いをして「よし、悪は逃げ去った」とまとめる。 振り上げた剣の降ろし場所を失って、呆然としていたダークエルフのヤオも、 我に返ると「コホ

の姿も見あたらない。 サーベルを鞘に戻して、 「もう大丈夫だぞ……」と少女に声をかけようとしたところ、 もう少女

するとエムロイを祀る巫女見習いだろうが、どこの神殿の所属だろうか?」とひとり愚痴をこぼし 黒ゴス神官服の少女の姿が見えなくなっていたのだ。別に礼を言って貰いたかったわけではないが、 てしまうのだった。 一言あってしかるべきだろうとも思えて、つい「随分と礼儀を知らないガキだ。年格好や服装から ついさっきまで自分の腰にしがみついて震えていたはずなのに、まるで幻であったかのように、

おくれっ。邪魔だから」 「ほら、 注文するならさっさと座りな。 それともただの冷やかしかい? 冷やかしなら出 てい 、って

デリラに声をかけられて、 元々食事をするつもりであったことを思い出したヤオは 「ああ、 すま

ん」と招かれるままに、カウンター席に腰を下ろした。

包丁をふるっていた料理長が、 ヤオに尋ねた。

「お客さん。何にする?」

「晩の食事がまだだ。 肉と野菜の焼いたものを適当に見繕って欲 じい。 それと飲み物は軽い もの

してくれ」

「酒精は入っていてい いのか?

「デリラ。こちらダークエルフのお姐さんにビールだ」

「はいよっ!」

緑の人を訪ねてきたんだって? 隣の席のドワーフが、 相当酔っていることの分かる赤鼻顔で「よっ、 なんでだ?」と語りかけてきた。 ダークエルフの女。 お前、

訳ありだニャ?」と気安く肩を叩いてくる。 ヤオを挟んで反対側の猫耳の娘も「わざわざ、 緑の人を訪ねてこんなところまで来るニャ

い態度を好意的に誤解した。 自分という存在が、酔っぱらい共の酒のつまみとなっていることに気付かないヤオは、 その気安

まで来たのは、 垣根が低くて良い人達のようだ。丁度良い、話を聞いて貰いたい。 頼みたいことがあるからなのだ。 諸君は、 緑の人がどこにおられるか知っている 緑の人を探してここ

か?」

頼み?」

「そうだ。是が非でも、 彼の者達の力を借りなければならないのだ」

……なるほど。それでロゥリィはあんな芝居をやらかしたと。

死神ロゥリィの復讐がこのように為されたことを理解した一同は、 無言で「あんたは、 その緑の

人にサーベル抜いたんだよ。ご愁傷様」とヤオを哀れむのだった。

高いハードルがさらに高くなってしまったと言える。 誤解にしろ何にしろ、自分に向けて剣を抜くような人物の頼み事を、 彼女が目的を達成するには、誤解を解いて謝罪をして、 さらに機嫌を取ってと、 快く引き受ける人は少な 最初から

ドワーフの男は、思わずヤオから目を背けると呟いた。

「もしかすると、無理かも知れんなぁ」

猫耳娘も、ヤオから目を背ける。

「そうだニャア。非常に難しいと思うニャ\_

何故だ? 緑の人は高潔な者達と聞き及んでいる。 ならば困っている者を見捨てることはないと

思うのだが………諸君がそのように言うには、何か根拠があるのか?」

黄金の液体を前に、 そこまで語ったところで、デリラが「はい、 ヤオは 「これがビールか」と呟いて、 お待ちつ!」とヤオの前にジョッキを置く。 まず一口含んだ。

うむ。美味い」

そこに料理長の料理が、ヤオの前に並べられていった。

と、呪いをかけるというものである。 よりこれこのとおり、 ヤオはそれらに舌鼓を打ちながら「無論、無料でものを頼もうとは思っておらぬ。 ちなみに盗難除けに冥王ハーディの護符も括り付けられている。正当な所有者以外が手にする 預かってきている」とテーブルの上に、ドンと、 人の頭サイズの革袋を置い 報酬も、

「金剛石の原石だ」

領地付きで買える。 これには、傭兵達が騒いだ。 しかもダークエルフ謹製ハーディの護符付きだ。 ちょっとした一財産どころではないからだ。 これ単体でも相当な高値がつ25だ。これだけあれば爵位が

でに覚悟は完了している。 「それに、 もしこれでも足らないということであれば、我が身を捧げることも厭わぬつもりだ。 親類縁者とも、 別離は済ませてきた\_ す

「おおおおおっ!」

今度は、傭兵のみならず男達と一部の女が騒ぎだした。

居ないだろう。 ヤオの肢体はそれほどに魅力的だった。 これを好きなように出来ると聞いて心動かない男はまず

傭兵の一人が、 俺では駄目かと言い出し、 他の傭兵達も「オレも、 オレも」と後に続く。 ヤオは

大人の女としての余裕からか「困った男達だ」という感じで小さく微笑んだ。その上で、 おそらく諸君では力不足だろう」と告げた。

46

ことではないってことだろうな」 「ま、それだけのお宝に加えて、我が身すら差しだそうってんだから、 頼み事って言うのも簡単

「そうだ」

「で、頼み事というのはどんな内容なんだ?」

周囲の視線が集まる中、 ヤオはジョッキのビールをさらに一口含んで喉を潤してから重々しく語

「手負い炎龍の、退治だ」

シュワルツの森に炎龍が飛来したのは、数ヶ月ほど前だった。

払っていたために留守を守っていた少数の男女が犠牲になるだけで済んだのである。 それは突然だった。それでも集落に住まうダークエルフ達の殆どが、たまたまの祭祀で村から出

同胞が次々と犠牲になっていった。 その程度で炎龍が満ち足りることはない。空腹になる度に飛来する炎龍によって、

このままでは部族が滅んでしまう。

クエルフ達は、 炎龍の狩り場と成り果てたシュワル ツの森を捨てて、 周辺の荒野や渓谷 Щ

岳地帯へと分散して隠れ住むことにした。

炎龍の襲撃から逃げまわる生活が始まった。

毎日毎夜、空を警戒し飛ぶものなら小鳥にすら怯え、 空襲を警告する角笛が響けば、 地に掘った

穴にモグラのごとく逃げ込んでは恐怖に身を震わせる。

だが、ほんの僅かな油断に炎龍は襲いかかった。

穴ごと焼き払われ、ほじくり出され、時に踏みつぶされる。

朝、挨拶を交わした同胞が、 夕刻には炎龍の鋭い牙に噛み砕かれ、 咀嚼され、嚥下される。

重な時間を使って、より険しい山へ、より深い谷底へと彼らは隠れ家を移していったのである。 耳にこびり付く悲鳴、断末魔の絶叫に背を向けて両手で耳をふさいで、友の犠牲が生み出した

しかし、 逃げ隠れしているだけでは生きて行くことは出来ない。

毎日の糧を得るには、 狩猟なり採集なりをしなければならなかった。 だが、 エルフにとっての狩

こうした危険を避けつつ、

得られ

狙いながら狙われ、獲物を捕った瞬間に自らが獲物となる。り場とは、炎龍にとっても狩り場であった。

木の皮を削り薄皮を蒸して食べ、泥水をすする。そんな毎日が続く。 量質共にたかが知れた。

集落から持ち出した蓄えは次第に乏しくなっていく。次第に軽くなっていく麦櫃や果物籠に不安 悲壮な覚悟で弓を手に狩り場へと出ていく若者達。

犠牲者が毎日のように出る。

てなかった。 両親を失った子供のすすり泣きや、 娘や息子を失った親が炎龍を呪詛する声が止む日は、 日と

復讐の怒りから剣を取り、弓を持って絶望的な戦いに挑む者もいた。

だけに終わった。 卵をいくら束ねても巨岩を阻むことが適わな いように、 彼らの挑戦もまた、 犠牲を増やす

精霊の加護も、 神銀の鏃も、 強靱な鎧にも似た炎龍の鱗を貫くことは出来ない

った。 無力である。炎龍の巣に無数に転がっている魔法の剣。 魔法の剣にわずかな可能性が見いだされたが、 その切っ先も届く間合いに入れなけ その中に、 新たなる一本が加わることとな れば、

絶望と虚無がダークエルフ達の心を捕らえていく。

絶えない。 疫病のごとく部族中へと蔓延していく。 冥王ハーディへの信仰が、彼岸への憧れとすり替わり、処刑台の笑いにも似た絶望微笑が不治 生きることに希望を失い、 自暴自棄の振る舞いに及ぶ者も

このままではいけない。こころある一人が、言った。

「あの炎龍にだって弱点はある。 あの片目に突き立っている矢がその証拠だ

炎龍に一矢報いたであろう神業のエルフの存在が、 彼らの勇気をわずかながら呼び覚ました。

「炎龍だろうと、必ず倒す術がある。 あのもぎ取られた左肩がその証拠だ」

の窮地から救い上げたという。 『鉄の逸物』と名付けられた魔杖は炎龍の左肩すらうち砕き、 そして、部族の総意を託す遣いが立てられることとなる。 その噂は、 滅びに瀕したダークエルフにとって最後の希望となった。 滅びに瀕したヒト種の村を絶体絶命

遣いの者に託された任は重い。

精神力と責任感、そして優れた生存力が求められる。 炎龍の魔爪から逃れ、 噂だけを頼りに緑の 人の下へとたどり着かねばならないのだから。 強靱

遣いの者に託された任は想い。

は部族の、 緑の人を援軍に請い願い、 いかなる手段を用いようとも助勢を引き出さなければならな 失敗

これだけの責務だ、到底凡夫では成し遂げられない。部族の、同胞や友人の滅びを意味してしまう。

知性の双方に恵まれて、 さらには中途で投げ出したりしない、 使命感に篤い者でな

ければならない。

部族中から若者が集められ、篩いにかけられていく。

そして二名の者が残った。その片方が、 ヤオ・ハー・デュッシである。

剣の腕と知性に優れ、精霊を使役する技にも精通する。

で投げ出すことはないだろう。 その不器用なまでの生真面目さは、 部族中に知らない者はいないほどだ。 彼女ならば使命を途中

50

るからだ。 有利であった。なぜなら彼女の魅力的な容姿は、 候補者は二人。だが技量、才幹、そして人柄。 そして、緑の人の指揮官は男だとも聞いている。 異性を交渉相手とする際に、 全てにおい て同じ水準ならば、 重要な武器となり得 女性であるヤオ

ったのである。 しかし、 猟に出れば、 事は簡単ではなかった。部族の長老達はヤオの顔を見るなり、「う~ 誰かの仕掛けたワナを踏み、木を切れば彼女の居るところへ倒れてくる。 というのも、彼女には運が悪く幸が薄いという重大な欠点があったからである。 ん」と唸ってし

遊びに出れば雨が降り、買い物に町に出れば店が閉まっている。

てみれば、 親友とも言える女性に彼氏を寝取られ、幼なじみの男性と紆余曲折の果てに結婚することになっ 婚礼前夜に夫が急死するという有様である。

て死亡してしまう。 その後喪の明ける頃に、未婚の未亡人に愛を囁く男が現れたが、その男も狩猟中に崖から転落し こうして、彼女に近付く男はいなくなってしまった。

余興のくじ引きで一等賞を引き当ててしまうという間の悪さ。 さらには、 普段クジ運などまったく無いのに、 友人の婚礼の宴会をヤオが仕切った時に限って

正直言えば、 その運の悪さを乗り越えて、 女性であることのメリットも消し飛んでしまうように思われた。 強く正しく逞しく生きてきた事を見てくれと、 だが、 彼女は自己アピ 運は悪い

ルする。

も出来なかった。 それは誰もが認めるところであったから、長老達も運が悪いという理由で彼女を落選させること

くて、 うか、とヤオは思っている。 ら報酬として相手に捧げる覚悟があるかを問うたのである。その言い様たるや、必要以上にしつこ そこで、 もしかして嫌がらせかと思うほどであった。実のところ、 長老達は女性を遣いとして選ぶ意味を切々と説いた。そして、必要となれば自分自身す 辞退させたかったのではないだろ

ない。炎龍一頭が代価なら、本懐であると胸を張った。 だろうと、 だが、ヤオはそれに諾と応じた。どうせ、男運無い 娼婦だろうと、メイドだろうと言われるままにやってやる。 し。相手が求めるなら、 ただし、 奴隷だろうと、 絶対に安売りはし

長老達は一抹の不安を抱えつつも、 ヤオを遣いとして選んだ。

部族の保有する最高 部族の未来は生か滅びかの二つに一つだ。ならば報酬を吝嗇っても意味がない。 の財宝が宝物庫から引き出されて彼女に託された。 ということで、

こうして旅に出たヤオは、 様々な不運困難を乗り越えて、 アルヌスの丘へとたどり着いたのであ

一 2. 炎龍編 ゲート 自衛隊 彼の地にて、斯く戦えり

ヤオの眠りは、耳を劈く轟音によって打ち破られた。

何事かと飛び起きて、 周りを見渡してみれば、 そこは木漏れ日の美しい森であった。

ことで野宿の寝床として選んだアルヌス麓の森。 折角街に着いたのに、 宿屋が無いと聞いてがっかりしつつも、 夜も遅くなった全ては明日という

恵みが豊かで非常に快適であった。 このあたりを仕切っているというエルフの手が入っているせい か、 そこは緑と水と、 風の 精霊の

そんな森の上空を、轟音と共に二本の剣が飛んでいた。

大空を切り裂くように、 天をめがけて駆け上がっていく翼は、 F4ファントム

大いに楽しんでいた。 『他に飛んでるのは鳥ぐらいだ。 退役間近な白銀の翼は、 規制のうるさい国内と違って離陸した途端管制官より通知された言葉 墜落しなければ、好き勝手に飛んで良し』に象徴される自由を、

落ち着けることを選んだ四十代の古強者だった。 練を受けるには歳を取りすぎていると自ら判断し、ファントムの退役と共に教育隊か、 彼らはパイロットとしては超ベテランで飛行時間も千の単位だ。だがF15やF2への機種 分解されてこの特地に運び込まれたファントムも 陸へと腰を

もう向こう側に持ち帰られる予定はない

けの空であった。それは、 彼らに最後に与えられた空は、 全ての空自パイロットが涎を垂らして羨ましがる大厚遇である。 常に道を譲らないといけない旅客機も、 米軍機もいない自分達だ

るインメルマンターン。 離陸して、脚を引っ込めた瞬間からアフター バーナーを全開にして高度一万メートルまで駆け上

次第に機首をあげるスプリットS。 百八十度ロールして大地と天を逆様に、 背面飛行から大地に向かって突き刺さるように加速して

挟んで、 せないようにはしているが……。 に遠慮は要らない。横転をかけて姿勢を戻し、 の陸自や、 中途で音速を突破させ、 がつんと叩くようにして、機首を引き起こす。 アルヌスの街に住まう住民に対しては一定の配慮はして、頭の上で雷みたいな音を響か 衝撃波を響かせても苦情を言う市民団体もない。 それにしたってみんな仲間だ。スロットル全開で、 振り回されないように両の膝でステックをぐ とはいっても、 空中の模擬戦 駐屯 いっと

急旋回のGは、 満身の力を込めて身体を支えた。 身体を締め上げる。 その瞬間に呼吸など出来るはずもない。 「ふんっ」 と腹筋に

い我慢比べだ。 Gが止んだ瞬間に、 ぜいぜいと呼吸をして酸素を取り込む。 戦闘機動はこの連続が果てることな

後席が叫ぶ。「後方を取られた\_

「こなくそっ!」

が周り、世界が転がる。敵を引きはがしたら、 急制動に、シザー。後方に食らいついた仮想敵を振り払おうと、あらゆる機動を駆使する。 逆に後ろを取りに回る。

判定をもぎ取った名パイロットがいたほどなのだ。 技術は世界的に見ても非常に高い水準にある。 ナイフエッジ、横転コルク抜き……今なら、ラプターだってロックオンしてみせる。 かつて、 F10という旧型機で、 米軍のF15から撃墜 空自の空戦

あらゆる枷から解き放たれた無頼達は、 自由な空で、 無邪気にはしゃぐ子どものようであった。

空を飛び回る、銀色の剣。

その風景は、空を舞う剣が鬼ごっこを楽しんでいるかのようにも見えた。

力が、彼女の視界をフライパスしていく巨大な剣に騎乗する者の姿を捕らえたからだ。 呆然と見上げていたヤオは、すぐにこれが人が操る物であることに気付いた。 エルフの

そして、笑みがこぼれた。笑いながらも涙が流れた。

噂は、本当だった」

天を我が者のように飛び回り、 大地に生活するあらゆる生き物を喰らいつくす炎龍

こんなものがあるのなら、 大空の支配者は最早、炎龍ではない。 炎龍の腕を喰いちぎったという鉄の逸物もあるだろう。 速さ、 鋭さ、すべてにおいて炎龍を凌駕する、

めに、始終、噂が間違いであった時のことを考えていたのである。 の願望を受けて、膨れあがるものだからだ。そして、 唯一の希望としてすがる気持ちこそ持っていたが、 絶望によって心が打ち砕かれることを防ぐた 正直言えば半信半疑でもあった。

噂を疑いつつも、半分信じ、希望を託して旅してきたヤオにとって、大空を自在に舞う剣 自分の旅が無駄でなかったことの証明であり、希望の保証となった。 の存

一 2. 炎龍編

このままあのアルヌスの街へ戻り、緑の人の代表者に会いさえすればいいのだ。 こうなれば、彼女の使命はほとんど果たされたも同然である。ヤオはそう感じていた。

われた。これで故郷の仲間は、一族は救われる。それがもう約束された既定事項のように思えてい 援軍を請い願い、説得することの困難さなど、 これまでの労苦に比したら些細なことのように 思

ヤオは、 「よしっ」と心を決めると、街へと向かって歩き始めた。

自衛隊 彼の地にて、斯く戦えり

走りになってしまう。 草を分け、歩く足取りは軽くて、次第に早足になる。まるで、 そして最後には、 風を切って走り出していた。 待ちきれないかのように、 つい

\*

アルヌスでは、 伊丹率いる第三偵察隊が完全武装を済ませて、 整列待機していた。

ゲート

点検をしている。

級と来てやがる。 一本ぐらい、 磁器、 真珠、 ちょっぱったろうかなぁ」 おおおっ 日本酒, なん てものまであるぞ。 しかも、 寒中 梅  $\tilde{O}$ 

「止めてくださいよ、柳田さん。これらは俺たちにとっての武器弾薬なんですから 傍にいたスーツ姿の外務省官僚、藤堂が冗句と理解しつつも、

真面目に応じた。

「本当か? 自分達で消費してるんじゃないだろうな?」

「その辺は、 信じて貰うしかないですね」

るいは贈賄として用いることになる。 リストを見ればデパートで開かれる全国名産品展でもあるかのような品揃えだ。 これらは贈答あ

荷物となってしまった。 壊れ物が多いのできちんと梱包してあり、 さらに量が多いために、 ちょっとした引っ越し 級の

金貨、銀貨、銅貨の詰まった箱。それぞれ中身もずっしりです」

報償、それと各種の工作活動、 金の使い道は、 帝都における各種の活動資金も必要で、 帝都における活動拠点として借りた家屋の家賃、 交際費等々で、 これらも木箱に詰められて積み上げられて 常に不足気味だ。 情報収集のために雇った人間への いた。 資

「抱かせ、 喰わせ、 飲ます。 このあたりは、 商社の接待と似たようなもんです。 あとは、 没落し

足を引っ張ったりとかの工作をしたりと、基本通りです」 貴族とか、 体制に恨みを抱いている連中を見つけ出して、そいつらを使って各種の噂を流したり、

ポンと叩きながら語った。 語学研修中とはいえ、特地にいる以上は働かされている若手官僚の一人が、 金貨の 話まった箱を

日本政府はこれらの貨幣を、アルヌス協同生活組合から 『購入』して賄っている。

るわけである。 アルヌス協同生活組合は、 これらの貨幣を売った代金の 門で、 さまざまなものを輸入して

なんて、 ちが強いか試してみようじゃないか』って言ってみたいですよ」 「発展途上国の役人なんて露骨ですよ 何度羨ましいなぁって思ったことか。 春暁の交渉の時に 『軍艦を出すぞ。 5. あからさまに賄賂を要求してきますか それでも良いのか?』とあからさまに恫喝してきまし 一度でもいいから『やれるもんならやってみな。 50 中 国  $\mathcal{O}$ 

「言えばいいじゃん? ここで」

りませんから、 この特地の政体は残して、それと親密な関係を維持するという方針に定まる可能性も無い訳じゃあ 「そういうわけにはいかないのが、 後々に禍根を残すようなことは出来ません。 外交ってものです。 植民地時代じゃないですからねぇ。 今は、 講和派を増やすことに専念しま 7

そんな会話がされている内に、 C Н 47 JAチヌークが降下してきた。

### 立ち読みサンプル はここまで

ローター風に地面の砂塵が巻き上げられていく。

降着するころになると、 立ちこめた砂煙で周囲が見えなくなってしまうほどだ。

柳田も、 後部ハッチが開かれると、第三偵察隊は桑原曹長の号令で、 外務省の官僚達とリヤカーを押し出した。 チヌークに向かって一斉に進み出す。

荷物を積み込み、 機体が動揺しても内部で転がり回らないように固定する。 それが済むと、

- 卜务全)車コが座るのと強忍して、加日は甲丹に言った側面に畳まれたシートを降ろして各位腰掛けていった。

外務省の連中が座るのを確認して、柳田は伊丹に言った。

「んじゃ、後は頼むわ。無事に送り届けてやってくれ」

伊丹は親指を立てて頷く。

ローターの回転が速くなり、再び砂塵が舞う。

柳田が降りると同時に後部ハッチが上がっていき、 チヌークも離陸して高度を上げた。

こうして彼らは帝都へと向かって飛び立っていったのである。

どかけて帝都に入る予定であった。 近くに降ろしては目立って仕方ないので、 アルヌスと帝都の距離は馬で十日行程だが、 帝都から離れた山中に降りて、 チヌークならばわずか半日だ。 そこから徒歩で一日半ほ とはいっても都市の

オは、 ルヌスの街手前で、 自分の頭上を飛んでいく箱船の騒音に思わず首を竦めてしまった。

感心しつつ、 空を舞う剣、 鉄の逸物、 ヤオは街へと入ったのである。 そして空を飛ぶ箱船… …ここまでくると、 緑の人達には何でもありだなと

03

ヤオは、困っていた。

片っ端から「済まないが、 街の中を歩きまわっては行き会う、それっぽい濃緑色の服とか、まだら緑の服を着ている人に 少し話を聞いて欲しい」と話しかけてみた。

ところが、どうにも言葉が通じない。

ざった表情を浮かべ、こっちの話が分かるのか分からないのかはっきりしない態度をとるのだ。 みんな一様に、 なんとも形容しがたい苦笑というか、 引きつった笑いというか、複雑な感情の 混

顔を見ると、 結局通じていなくてがっかりする羽目になる。 多少は分かっているんじゃないかなぁと思えるので、 一生懸命話をして、 終わって

中には言葉の出来ない者もいるのだろうと思って、

手当たり次第に声

をかけた。

徒労感に苛まれながらも、

そうして半日。 おそらく、 二十~三十人くらいに声をかけたのではないだろうか。